

# IS00～異星からの革新者～

カンパ639

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ELSとの対話を終えマリナと再会を果たした刹那がマリナと共に気付けば異世界に!!という話。

※作者のやりたいように適当に作る作品になります。00のキャラを沢山出したと考えています。ガンダムマイスターは全員出します。出来ればCBメンバー、イノベイター、連邦、アロウズなどの主要メンバーも出していきたい。因みにカップリング要素とか入れています。どんな感じにする予定かは第一話前書きを見てください。

# 目次

第一話	再会	1
第二話	刹那・F・セイエイ	6
第三話	世界の歪み	12
第四話	S H R	23



# 第一話 再会

（西暦2364年）

人類が外宇宙に向けて進出する記念すべき日。それと時を同じくして2人の人物が再会を果たしていた。再会を果たした2人の名は元アザデイスタン王国皇女『マリナ・イスマイル』と私設武装組織ソレスタルビーイングのガンダムマイスターにして世界で一番最初の純粹種のイノベーター『刹那・F・セイエイ』。殆ど過ごしてきた年月の変わらないはずの2人だが、その容姿は正反対のものであった。マリナは年齢相応の見た目をしており既に老化によって目が見えない状態にあるのに対し。刹那は未だに20代の青年の見た目のまま。だがその見た目は一般の人とは違い銀色の肌をしている。刹那はおよそ50年前に地球へとやってきた異星体『ELS』との対話を通しELSとの融合した。イノベーターであり異星体となった刹那は殆ど年齢という概念が存在しなくなってしまう。50年という時間は二人の容姿に大きな差を作り出している。だが二人は受け入れる。容姿や種族など関係ない。目指す場所は同じでも互いにすれ違い続けた二人は50年という時を経て分かり合うことができたのだから。そうして抱擁を交わした二人を優しい光が包み込んでいった。そしてその光が収まったと

きには二人はその場からいなくなっていた。

く I S 学園 く

「おいおい、こんな時に侵入者かよ？」

「ど、どうやらそうみたいですな。」

ここは I S 学園。世界のどの国家にも属さず干渉を受けることのないインフィニット・ストラトス通称 I S を学ぶ機関である。今現在とはある事情からバタバタしておりどの教員も忙しそうに走り回っている。何故忙しいのか？それは男性操縦者が二人見つかったからである。男性操縦者が見つかるかどうかどうして忙しいのか？それは I S の特性にある。I S は女性にしか動かせないのである。10年前に開発されたから今まで一人の男性操縦者も見つかっていない所急に二人も男性操縦者が現れたのである。それは忙しくもなるというものである。

「いま、ミス千冬は弟君の処理で大忙しだろ？」

「そうなんです。デイランディ先生。」

「ニールでいいミス真耶。デイランディはなれなくてね。」

そしてそんな男性操縦者の一人ニール・デイランディは教員として I S 学園に採用されることが決まっていた。そしてそんな大忙しの時にこの I S 学園に侵入者が現れた

というのである。普段であれば世界最強にしてブリュンヒルデの称号を持つ『織斑千冬』が対応するのであるが今回もう一人入学する男性操縦者は『織斑一夏』といい千冬の弟なのである。やはり弟の事が心配なのか千冬は一夏のことと対応に当たっており現在侵入者に対応することはできない状況なのである。

「なら、私の事も真耶って呼んでください。ニール先生。」

「オーライ。それで真耶侵入者の件なんだがなんなら俺が見に行こうか？」

ニールは先ほども言った通りまだ採用されたばかりでありいま現在特にやる事がなく、簡単に言えば暇なのである。

「えっと、いいんですか？」

「ああ。さてそれじゃあ早速現場に向かいますか。」

そうして、ニールは真耶と別れ一人で現場に向かう。

ニールは一人で歩きながらも現在の状況について考える。ニール・デイランディは元ソレスタルビーイングのガンダムマイスターであり、その戦いの最中に家族の仇を討ち死んだはずだった。だが気付けば見覚えのある両親の元に生まれていた。そうしてニールは異世界それも自分がいた時代よりも大きく過去の両親の元に生まれた。そしてしばらくして妹が生まれエイミーと名付けられた。両親と妹のエイミーの四大家族で暮らしていた。そう一つだけ違うのは双子の弟のライルがない事だった。だがラ

イルがないことを除けば前回と比べてかなり平和な暮らしをしていた。もちろん世界情勢についても調べた。結論を言うとこの世界は平和だった。だがしかしニールが14の歳になった頃インフィニットストラトスが世界に出回った。それによって大きく世界は変わった。だがそれでも表だった戦争やテロはなく世界は一応の平和を保っていた。そして大人になったニールは戦いの道を選ばず普通に就職を果たした。それからしばらくして世界初の男性操縦者である織斑一夏が見つかり、男性操縦者が他に存在していないかどうかを調べるための適性検査が行われ、そこでニールにIS適性がある事が判明し今に至る。

### ニール視点

侵入者がいる場所が近くなってきたな。しかし、こんな白昼堂々この場所に侵入してくるやつなんざ本当に存在すんのかねえ。俺がそんなことを考えていると現場についてた。そこで俺は目を疑った。そこに広がっていたのは花畑であり日が差し込み幻想的な雰囲気醸し出していた。その花畑のちょうど中心で二人の男女が抱き合っていた。そして俺はその二人に見覚えがあった。特に男の方は見た目こそ大きく異なっているがそれでも見間違えるはずがなかった。たくさんの考えが頭を駆け抜ける。もう二度と会うことはないと思っていた。何故なら俺はあいつの目の前で爆発に巻き込まれて



死んだのだから。

「刹那……」

口をつけて名前が出てしまった。その声に反応し刹那がこちらを向く。

そしてその顔に驚愕の色が浮かぶ。

「まさか、ニール……。ニール・テイランデイなのか!？」

異世界にて深緑の狙撃手と革新者が再会した。だがこの再会はほんの序章に過ぎない。舞台は女尊男卑の蔓延る異世界。ここに再びガンダムマイスター達は集い始める。この再会が多くの変革を世界にもたらしてゆくことはこの時はまだ誰も知らない……。

## 第二話 刹那・F・セイエイ

『ロックオンがそこにいるのか!?』

「っテイエリア!？」

突如刹那の身体から声が響く。声の主は刹那と共に50年の対話の旅に出たテイエリアである。声は刹那の首にいつの間にかついていた花の形のネックレスからだった。

『刹那! 僕の体を用意してくれ。…頼む。』

最後の頃にはテイエリアの声は懇願するような声音に変わっていた。刹那もテイエリアの気持ちは分かっていた。二度と会えないと思っていたのだから当然のことだ。

「ああ、もちろん。」

刹那はELSの力を使いテイエリアの体を作り上げる。作り上がった体が目を開ける。テイエリアにとつては50年ぶりに持つ肉体(?)である。だがその違和感を無視し自分が変わるきっかけを作った人物へと目を向ける。

「本当にロックオンなのか?」

「…ああ、もちろん。俺はロックオン・ストラトス。ソレスタルビーイングのガンダムマスターだ。」

ニールは自分の弟のライルが同じコードネームであるロックオン・ストラトスとしてガンダムマイスターになったことを知らないが故の自己紹介なのだ。がそれでもティエリア達にはわかる。彼が自分たちの知るニール・ディランデイなのだ。

「しかし、刹那はだいたい変わったな見た目もそうだが……なんというか雰囲気って奴か？」  
「変わったと言ってもらえるのは嬉しい。だが———そうか。ニールから見れば見た目があの時と変わっていないからそう思うんだろう。だが、実際には俺たちがニールと別れてからもうおよそ60年の時が経とうとしている。」

「なにっ!？」

ニールから見ればマリナ・イスマイル、刹那、ティエリアは多少の差はあれど見た目に大きな変化は見られなかった。だからこそ驚いているのだ自分が死んでからおおよそ60年も経っていることに。

「そう、おかしいんだ。今自分の肉体を調べたが確実に若返っている。そしてマリナも。」

一番肉体に変化が起きているのはマリナだ。さつきまで目も見えない老婆だったはずがいつのまにか刹那と会った頃の年齢まで若返っている。

「え、ええ。私も何がどうなったのか。……でもこの目でもう一度刹那を見ることが出来るのね。」

マリナは刹那をこの目で見る事ができるのか嬉しかった。50年ぶりに見た刹那はELSと融合し体が金属になっている以外に変化は見られなかった。まだ刹那に手を繋がれたままの状態になっておりそれを認識すると少し顔が熱くなった。

「どうかしたかマリナ？」

「大丈夫よ刹那。ただ、嬉しいの。貴方と理解りあえることが、貴方と手を繋げる事が、貴方の顔を見られることが。」

そう言つて刹那に向かつて微笑みかける。それに対し刹那もマリナに向かつて微笑みかける。対話を経て刹那は昔よりも感情が表に出るようになっていた。昔の刹那ならばこの状況でも無表情のままであつたであろうことは想像にかたくない。

「ああ、とりあえず。色々と聞きたいことはあるんだが少しめんどくさい状況でね。今俺は教員をしているんだがこの学園は少し特殊な環境にあつてな…。今、お前らは侵入者つっ―扱いになつちまつてる。このままにしておくと厄介な人がやつて「ほう、それは誰のことだろうな。ニール先生？」おっと少し遅かつたかあ。」

ニールが後ろを振り返るとそこには想像通りの人物が立っていた。世界最強の称号を持つ織斑千冬だ。

「さて、全く戻つてこないと真耶から聞かされてきてみればまさか侵入者と楽しく談笑とはな。」

「待つてくれミス千冬。こいつらは侵入者じゃあない。色々事情はあるみたいだがここにいるのは偶然の産物だ。」

「ほう、だいぶこいつらのことを信用しているようだな？だが、信用するには少し奇妙なところが多すぎるだろう。それこそ真ん中の銀色の男とかな。」

その言葉を聞いていた刹那が反応を示す。それを見た時にニールはとても嫌な予感がした。だがニールは刹那を信じていたまさかこのタイミングで下手なことはいないだろうと。昔の刹那相手であつたならば止めたかもしれないが先程から話している感じから昔よりも落ち着いた様子が窺えたため止めるのを躊躇ってしまった。それが決定打になるとも知らず。

「そうか。この姿は普通の人たちと過ごす上では不自然だったな。」

そういうと刹那の肌とパイロットスーツが変化していく。肌は少し色黒の肌色に。パイロットスーツはメタリックがかつた色彩から深い青や黒色に変化していく。それを見た千冬は驚きに目を見開いている。因みにニールも少なからず驚いているが刹那が相手だから千冬よりは驚きが少なく済んでいた。

「貴様……何者だ？」

「おいおい、刹那。お前だいぶびつくり人間になつちまつたなあ。」

「そうか、話していかなかったな。俺は刹那・F・セイエイ元々は人間だった。今は地球外

変異性金属体『E L S』と対話の果てに完全融合したイノベイターだ。」

千早にとつてもニールにとつても分からないことだらけだがとりあえず分かることは刹那・F・セイエイが普通の人間ではないということだけ。だがニールだけはこのマイペースさを見て「やっぱり刹那はどれだけ変わつても刹那か」と思ったという。

「さて、どうするミス千冬さっきのを見ても今の話を嘘だと思うかい？」

千冬からすれば突拍子もない話である。今の話について千冬が考え込んでいると、ニールから言葉が飛んでくる。

「ミス千冬刹那の目をよく見てみろよ。あんたならわかるはずだぜ？」

そう言われて刹那の目をじつと見てみる。千冬の目をじつと見返している。その目には一つの曇りも浮かんではない。戦いに生きるものとして人の目を見れば大体の善悪は分かるようになった。そして刹那の目はどこまでも純粹で覚悟を持った目をしていていた。

「あいつはなあ、どこまでも真つ直ぐなんだよ。少なくとも持った力を自分欲望の為に使うようなやつじゃない。」

「ああ、どうやらそのようだな。…とりあえず話は聞かせてもらおうぞニール先生。」

「了解。とりあえずお前から俺についてきてくれ。そこで互いの情報を整理しよう。」

「ああ、よろしく頼むニール。」

そしてこの後、刹那達は知ることになるこの世界の歪みを。

## 第三話 世界の歪み

「さて、説明してもらおうぞニール・デイランデイ。」

IS 学園の応接室へと通されるやいなや千冬は情報を聞きにかかる。もちろん最初のターゲットは教員の一人であるニールである。

「はあ、やっぱり俺が最初か。オーライ、まずは何が聞きたいミス千冬?」

「…そうだな。まずはなぜその三人を知っているのかについて話してもらおうか。」

「ああ、分かった。…なあ、ミス千冬。「さつきから思っていたがミスはいらんそれと学園の教師なのだから学園では先生をつける。」千冬、あんたは転生つてもんを信じるか?」

「…宗教の勧誘なら断るぞ?」

「そういう訳じゃないさ。俺はな一度死んだんだ。それも遠い未来もしくは異世界でな。」

「なんだと?」

ニール達が生きていた時代は西暦2300年代そして今生きている時代はそこから300年も前である。そんな時代にISなんてものがあれば歴史に残る事は間違いが



ない事である。それにもかかわらずニールは生まれ変わってから初めてISという物を知っただからこそ生きていくうちにこの世界が異世界であることを悟ったのである。

「その三人もか？」

「ああ、だが俺たちはニールのように死んでこの世界に来たわけではない。対話を終え地球に戻り気付けば俺たちはあの場所にいた。」

「…そうか。」

嘘はついていないと千冬は思った。信じるには突拍子もない話だ。まだ会って間もないが二人目の男性操縦者という事でニール・デイランデイという男を観察していた。昨日一日観察した結果千冬としての評価は『軽い男、ISという男を観察していた。を教えるに値しない』というかなり酷めの評価だった。だが今の話、それにニールの目を見てその評価は180度ひっくり返った。昏い目でありながらもどこか覚悟を感じさせる強い瞳だった。そこで千冬は理解した。普段の飄々とした態度も彼の素の状態の一つではあるのだろうがその裏に秘めた物を隠すためのものでもあるのだろうと。

「なあ、ニール・デイランデイ。…いやお前だけじゃない。その三人もそうだ。一体お前達は何者で何と戦っていたんだ?！」

「…俺たちは私設武装組織ソレスタル・ビーイング。紛争根絶のために武力介入をもつて全世界に喧嘩を売った咎人だ。」

そこのお姫様は違うけどなつとニールは付け加える。それを聞いた千冬は愕然とした。その圧倒的に矛盾を孕んだ活動に。武力に対して武力をもって介入し世界の紛争を全て止めようというのだからおかしな話だ。

「俺の名前はロックオン・ストラトス。成層圏の向こう側まで狙い撃つ男だ。」

「俺の名前は刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ。」

「僕の名前はティエリア・アーデ。人類の覚醒を促すために作られた存在イノベイドだ。」

「私はマリナ・イスマイル。アザデイスタンという国で皇女をしていました。」

四人それぞれが自分の紹介を千冬にしていく。あまりにも内容の濃すぎる面々に千冬は頭を抱える。そうでなくても自分の弟のことで対応に追われているのにそれ以上にめんどくさそうな案件が転がり込んでしまったことに頭が痛くなった。

「先ほど言っていた『ガンダム』とはお前がもっているような専用機のことかニール?」「ああそうだ。俺のはデュナメス、ガンダムデュナメスだ。遠距離からの狙撃がメインの機体だ。」

そう千冬は話を聞いているうちに大体ガンダムというものについて察していた。ニールの持っているISの専用機は世界でも珍しい全身装甲フルスキンのISであった。ニールがISに触れた後に変化が起きその姿になった。その言葉を聞いた千冬はさらに頭痛

がひどくなるのを感じる。今日は厄日かもしれないと千冬は考え始めた。しかし千冬の悲劇はそれで終わらない。千冬が次の質問を考えている時に応接室がノックされた。千冬が声をかけると同僚の山田真耶が入ってきた。

「どうしたんだ真耶。何かあったのか？」

「えっと、織斑先生。その先程の侵入者の方々からI S反応が確認されたのでそれを伝えに……」

そう言つて真耶が指さすのは刹那とティエリアの二人先程ソレスタルビーイングの一員であるで紹介された二人だった。

「セイエイ、アーデお前達ここに来てから何か新しく身につけたようなものはあるか？」  
「ああ、ならば心当たりがある俺の場合はこのネックレスだろう。」

「僕はこのブレスレットだろうか。刹那に作ってもらった体だから刹那の趣味なのだと思っていたのだが。」

刹那の首についているネックレスにはフェルトから貫つたあの花が象られている。今ではE L Sのおかげもあつて地球の平和の象徴である。ティエリアの腕にはブレスレットが付いている。向日葵が象られており全体的に黄色が印象的なブレスレットだ。「すまない。少しネックレスとブレスレットをこちらで調べさせてもらえないだろうか。」

「それは構わない。だがその前に聞かせて欲しい。先程からたまに出てくるISとは一体なんだろうか。」

「ああ、すまない。聞くことに集中しすぎていたな。こちらのことについて説明するのにISの存在は欠かせないからな。」

そういうと、千冬はISというものについて説明を始める。

「ISとは、今から10年ほど前にたった一人の天才によつて生み出されたパワードスーツの名称だ。その時代までに存在した全ての兵器を置き去りにしてしまうほどの性能を持った最強の兵器だ。」

「…兵器。」

「ああ、そうだ。これまでの兵器と違い機動力が高くそこに従来の兵器とほとんど変わらない攻撃力を兼ね備えている。そして、最も大きいのはシールドエネルギーを用いたバリアーや絶対防御による防御力にある。絶対防御はその名の通り搭乗者に危険が迫った時に必ず発動するようになっていいるんだ。シールドバリアーと絶対防御による二重防御これがISという兵器だ。」

「だがそれだけの性能だ数に限りはあるんだろう?」

「ああ、そのISには必ずコアが存在するんだが、そのコアは生みの親である篠ノ之束にしか作ることができない。そしてその篠ノ之束は世界に467個のコアを残しその姿

を眩ませている。だからISは世界に467機以上は存在しない。」

「先程の性能を誇る兵器が467機も存在するのか。」

「そうだ刹那。俺たちがいた時代のオーバーテクノロジーであったガンダムのオリジナル太陽炉でさえあったの5個しか存在しなかっただろ？だがこの世界にはオリジナルの太陽炉が467個あるのと同じようなもんだ。それにこの兵器はそれ以上に大きな問題を抱えてるんだよ。そうだよなあ千冬？」

「ああ、それこそがこの兵器の唯一にして存在してはいけない欠点だ。」

「…ISはな女にしか動かせないんだよ。」

「なにっ!？」

それは大きな欠陥であった。結果として世界は女尊男卑の概念に染まり、世界は変わった。それも良くない方向に。

「それこそがこの世界の歪みだ『女尊男卑』社会的に男が虐げられている。ISは大きく世界を変えちまった。今はまだアラスカ条約などの抑止力が存在しているがそれも時間の問題だろう。だから俺は自分の今の状況を運命だと思ってる。本当なら平和に過ごしていたかったさ。だが俺は偶然にも世界で二番目の男性操縦者になった。俺は今度こそ世界を変えて見せる。それこそが俺という罪人が生まれ変わった理由だと思っ  
てな。」

「そうか…。」

そこまで聞いた刹那は千冬にネットワークスを預ける。そしてティエリアも同じように預けた。

「解析をするなら早目に頼む。」

「ああ、真耶頼んだぞ。」

「はいっ!」

真耶は急いで部屋を出て行く。

「何故、急に預けるつもりになった?」

「俺達はISというものについてほとんど何も知らない。解析をしてもらうならここでしてもらったほうがいいとそう考えた。そして、俺はニールと共にこの世界の歪みと戦う。」

「僕もそれには賛成だ。ロックオン一人に背負わせるわけにはいかない。」

「…刹那。」

「大丈夫だマリナ。俺は悪意に対して武力で答えるつもりはない。人間は分かり合える。だからこそ対話による紛争根絶を俺は行う。」

「お前ら…。いいのかわ、俺に付き合う必要なんてないんだぜ?」

「僕達は、ガンダムマイスターだ。同じ志を掲げる仲間だ。そうだろロックオン・ストラ

トス！」

「テイエリア……。ははっ、お前も随分と変わったなあ。……ありがとよお前ら。」

「話はまとまったか？」

「ああ、すまん千冬先生。こいつらもおそらくISを動かせる。少し面倒かもしれないがこの学園で見てやってくれないか？」

「はあ、本当に面倒ごとを押し付けてくれる。だが確かにそいつらを外に出すと何をしでかすか分からん。いいだろう三人ともIS学園で面倒を見てやる。」

「すまないが、マリナはISには乗らせたくない。」

先程まで、特に何も口を出さなかった刹那が抗議の声をあげる。

「それは何故だ？」

「彼女は武器を持つ人ではない。マリナは戦いの最中でも武力以外での平和を目指すような優しい女性だ。自分が殺されようとも力をかぎすことはしない。そんな彼女に武器を持たせたくはない！」

「無理だと言ったら？」

「どんなことをしてでもここを抜け出す。」

部屋の中に緊張が走る。がその緊張はすぐに解ける。

「分かった。ちようどいいことに保健医が不足していてな。彼女は保健医としてこの学

園に在籍してもらおう。戦争を生き抜いたということは応急処置はできるだろう？」

「ええ。応急処置ぐらいなら。」

「さてどうだ。セイエイ？」

「ああ、讓歩に感謝する。」

「さて、では改めてこれからについてだが、まずマリナ・イスマイル貴方には先ほども伝えた通り保健医として学園にいてもらう。そしてティエリア・アーデ、刹那・F・セイエイは学生として在籍してもらう。理由なんだが急にお前達には学生としての立場からISという兵器の怖さ彼女達に教えてほしい。彼女達はISを殆どスポーツ感覚で見ている。だがそれではいけないんだ。彼女達にはISが兵器であるということを知って欲しいだからこそあなた方の力を借りたい。」

「了解した。よろしく頼む織斑千冬。」

「ああ、よろしく頼む。」

そう言つて、刹那と千冬は握手を交わす。

「はあ、俺たちも忙しくなりそうだなティエリア。」

「ああ、だが今度は無理はしないでくれよロックオン。…いやニール。貴方の抜けた穴は埋めるのも大変だった。それにみんなに大きな傷を残したのだから。」

「ああ、気をつけるよ。後、俺の抜けた穴を埋めたのはどのどいつだ？俺の知ってるや



つか？」

「ああ、貴方も良く知る人物だ。名前はライル・ディランディ貴方の弟だ。」

「なんだって!?!ライルが?」

「ああ、あの子の話も追々貴方に教えよう。今教えるにはだいぶ長い話になる。」

「了解。だがしかしそうかライルがなあ。」

「はあ、まさか一夏のやつ I S を動かしちゃうなんて。…でもおかげで少し遅れるけど I S 学園に行けば一夏に会えるってことよね。」

一人話している彼女は鳳鈴音中国の代表候補生である。彼女は今日も I S の訓練を終え家路へとついている最中だった。

「えへへ、なんかそう考えたら嬉しいかも。私との約束忘れてないかな一夏。…うん? うそつあれ人じゃない!?!」

鈴は普段帰っている町の途中で倒れている人物を発見した。

「ちよつと、あんた大丈夫?」

「つ。…何処だここは?」

「何処って、中国よ。何あんたもしかして記憶喪失なの?」

「中国?俺は地球にいるのか?」

「はあ、何言ってるんのあんた地球以外に何処があるってのよ。」

そこで男は何か違和感に気づいたような顔をする。

「なあ、嬢ちゃん。今は西暦何年だ？」

「はあ？何よその質問。やっぱ頭でも打ったんじゃないの？後、嬢ちゃんじゃなくて凰鈴音って名前があんのよ。」

「いいから答えてくれ凰。…頼む。」

「…まあいいけど。今は20XX年よ。」

「…やっぱりそうか。」

「やっぱりって何よ。後私あんたの名前聞いてないんだけど。」

「ああ、すまん。俺の名前は——ライル・デイルンデイだ。」

## 第四話 S H R

「とりあえず部屋を用意しよう。すまないがセイエイとマリナさんには少しの間一緒に部屋で暮らしていただきたい。それとアーデはディランデイと一緒にだ。」

「了解した。少しの間よろしく頼むマリナ。」

「ええ、剎那。」

「よろしくなテイエリア。」

「ああ。」

こうして部屋割りも素早く決まり、次の話題に移る。

「さて、この学園に入学するにあたってお前達に渡しておかなければならないものがある。」

そう言つて千冬は三冊の分厚い冊子を取り出す。ニールはやつぱりそれかというよな顔をしている。

「これは、I Sの参考書だ。これを一週間後の入学までに覚えてきてくれ。因みにこれは絶対だ。特にその二人セイエイとアーデお前達はこれを覚えていなければ授業についていけなくなるからな。」

「りよ、了解した。」

「…この量を一週間で…か。」

流石の刹那とティエリアも少し声が震えている。それだけ冊子が分厚いのだ普段動じることのない二人でさえそうなのだから。

「まあ、俺はそれなりに時間があつて、もうほとんど覚えてるからな何か分からないことがあつたら聞きに来い。」

ニールは二人に対して助け舟を出した。ニールは元々ソレスタルビーイングにいた時も兄貴分のような存在であり何かと問題を起こしがちなメンバーのまとめ役をしていた為刹那達をまとめて面倒を見ることにしたのだった。

「本来ならば適性試験や入学試験があるのだがなお前達は特に実施しない。ISの解析などがあるからなおそらくやつている暇がない。だからこそ実力は入学後に見させてもらう。」

そうして千冬は応接室を後にする。刹那達もそれぞれ部屋へと戻り各々の時間を過ごす。刹那とマリナは色々と話に花を咲かせながらも真面目に勉強に取り組んだ。一方、ティエリアとニールは。

「そうだ、さっきの続きを話してくれよティエリア。」

「さっきの？ああ、ライル・デイランデイの話か。」

「そうだ、そもそも俺は自分が死んだ後の状況を知らないからな一体世界がどうなったのか、ライルの事、刹那の事とか聞きたいことがいっぱいあるからな。」

それからティエリア達はたくさんのことを話したそして話しすぎた結果、ティエリアは勉強を忘れ翌日以降とても焦ることとなる。そして、あつという間に一週間がすぎた。

織斑一夏はとても居心地の悪さを感じていた。ここはIS学園1年1組の教室。周りは自分以外全員女の子である。ある意味で言えば羨ましい状況なのかもしれないが向けられる視線はライオンの檻の中に放り込まれた一人の人間といった感じである。食い尽くさんばかりの視線がこれでもかと思われている。

(くう、視線が痛いつていうのはこういうことを言うのか？あまりにも男一人はキツすぎる…)

一夏がクラスを見回しているとそこに知り合いの姿を見つける。

(あれつて、箒だよな？いやー久しぶりだなあ。あつ、目が合ったつと思つたら一瞬にして逸された。くそつ、周りに味方はいないのか。俺以外に男がいれば…)

その一夏の祈りが届いたのか教室の扉が開く。そして二人の人物が入ってくる。この1組の副担任である真耶とニールである。ニールが入ってきた途端少女達の視線は

ニールに釘付けになる。

「全員、揃ってますねー。私は山田真耶と言います。1組の副担任を務めますよろしく  
お願いしますね。それじゃあSHRを始めますよー。」

誰もその言葉に反応を示さない。二人いる男性操縦者に目がいってしまっている為  
誰も反応を示さない。真耶は涙目である。

「同じく副担任をすることになったニール・デイランデイだ。後、何か反応くらいはして  
やれ、真耶先生が不憫で仕方ない。」

「うう、ありがとうございますニール先生。」

とりあえずは名簿順に自己紹介をしていつて貰うことにした。それを見ていた一夏  
は内心ほっとしていた。自分に集中していた視線がニールに集中してかなり居心地が  
良くなったのだ。だがその安心が良くなかった。

「織斑一夏君、織斑一夏君！」

「はっ、はい！」

自己紹介の番が自分に回ってきていたことに気づかず大きな声を出してしまった。  
しかもかなり裏返った。周りからはクスクスと笑い声が聞こえてくる。かなりの恥ず  
かしさだった。

「あつあの、大声出しちゃってごめんね？おつ、怒ってるかな？でっ、でも自己紹介『あ』から始まって『お』の織斑君の番なんだ。ごめんね？自己紹介してもらってもいいかな？」

「わっ、分かりました！やります、やりますから！」

再び周囲からの視線が一夏へと突き刺さる。一夏はもちろん自己紹介など考えていないのでかなりテンパっていた。

---

side ニール

あれはかなりテンパってやがるなあ。織斑一夏、織斑千冬の弟にして世界で初めての男性操縦者か。世界最強のIS乗りの弟が世界初の男性操縦者。これは偶然なのか？まあ、今そんなことを考えても仕方がねえ取り敢えずは成り行きを見守るとしますか。

「おつ、織斑一夏です。よろしくお願ひします!!」

それだけかあ？何かもう少し話さないと…って言ってたら来ちまったか。御愁傷様ってやつだろうな。

ニールの目には出席簿を持った織斑千冬の姿とその後をついてくるティエリアと刹那の姿が写っていた。

---

side  
????

なんだかライルさんそっくりですう。というよりニール・ディランディって確かライルさんのお兄さんの名前だった気がするです。あつニール先生が何処か別のところを見てるです。…あれは…アーデ…さん？

周りからのそれで終わりっ？という目線を感じる。慌てる一夏は、何か言わなくてはと考え

「以上です!!」

はつきりそう言い切ると周囲の女子達がまるでコントのように椅子から転げ落ちる。

一夏は内心ガッツポーズをしていた。

スパアアアン!!

「イッテエ!!」

すわっ! 敵襲!?!と思しながら一夏が振り返るとそこには鬼神が立っていた。

「自己紹介もまともに出来んのか、お前は?」

「ゲエ! 関羽!?!」

スパアアアン!!

もう一度出席簿のいい音が教室に響き渡る。



「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

そうして千冬は利那とティエリアを引き連れ教壇へと向かう。

「あつ、織斑先生。もう会議は終わつたんですか？」

「ああ、山田先生、ニール先生。HRを任してしまつてすまなかつたな。」

「副担任だからなこれぐらいはするさ。」

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛えぬくことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

軍隊かと思わせるほどのかなり厳しい言い回しであり一夏なんかは心の中で『いったい何処の独裁者だよ』と考えていたが周囲の変化がその一夏の考えをかき消す。

「キヤー!!、本物の千冬様よー!!」

「ずっと、ファンでした!」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです!」

「私、お姉様のためなら死ねます!」

先程の独裁者のような言葉を聞いてその言葉が出てくるのは若干15〜16歳という若さゆえなのだろうか。憧れというのは怖いものである。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？  
私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きやあああああつ！、そんな、お姉さまに叱っていたただけるなんて!!」

「もつと叱つて、罵つて下さいお姉様!!」

「でも時には優しくして!」

「そして付け上がらないように躡……いえ、調教してください!!」

あまりの熱狂ぶりに刹那とティエリアは頭を押さえる。そう彼女達の興奮が刹那達の脳量子波を乱したのだ。ここにリボンズがいれば「くつ、ボクの脳量子波を乱すなあ!!」と言っていたことだろう。

「で?お前は自己紹介も満足に出来んのか。」

「いや、千冬姉、俺は——」

スパアアアン!!

本日三度目の音が響き渡る。

「織斑先生と呼べ。」

「……はい、織斑先生。」

「とりあえず、席につけ。まだ紹介しなくてはならん奴が二人もいるからな。さて自己紹介をしろセイエイ、アーデ。」

## side ティエリア

教室に入つてすぐに一人の少女と目が合った。その少女は僕を見ると大きく目を見開き驚愕の表情を浮かべていた。そしてそれは僕も同じだった。あの時の告白を忘れたことはなかった。次にいつ会えるか分からなかったから返事はしなかった。その少女はミレイナだった。ミレイナは目に涙を溜めてじつとこちらを見つめている。僕も彼女から目が離せなかった。その涙が僕のせいだと思うとイノペイドであるはずの僕の胸が締め付けられるようだった。

刹那は自身の自己紹介が終わっても微動だにしないティエリアを訝しく思いその視線の先を追う。そこにはミレイナ・ヴァステイがいた。ティエリアと彼女は互いに目を逸らさずに見つめ合っていた。だがその両者とも泣きそうに顔を歪めていた。流石におかしいと思つたのか千冬が声をかける。

「おい、どうしたアーデ。自己紹介をしろ。」

それに対しティエリアは体をびくりと震わせ千冬に目を合わせ「あつ、ああすまなかつた。」と謝罪の言葉を述べ

「ティエリア・アーデです。これからよろしくお願いします。」

その後男性操縦者が四人もいることにはふたたび女子達から歓声が上がることがどうやら  
テイエリアには聞こえていないようだった。そのまま、荒ぶっている少女達を千冬が沈  
めS H Rは終わった。